



おひざのうえで

(副園長の子育ておうえん通信) (30年12月)

「主体的に学んでいく力」



せんりひじり幼稚園
副園長 安達 かえで

1ヶ月間かけて話し合っ作り上げ、運営をしてきた年長組のお店屋さんプロジェクトが、いよいよ閉店になりました。読売新聞にも、「非認知能力の育つお店屋さんプロジェクト」として、せんりひじりが掲載されましたが、お店屋さんプロジェクト活動での子どもたちの驚くような創意工夫や主体的な姿に感動の毎日でした。閉店するのが寂しいです。

ところが、れんげ組の前を通ったときに「もう閉店だよね。寂しいな・・・。」と声をかけると、「まだやってるよ～」とのこと。閉店するのではなく、「きょうふのじんじゃ」をリニューアルしているようです。通路を狭くしたりお化けの配置を変えたりして更に怖くするようです。驚くのが、リニューアルのきっかけが「売上げが減った(もちろん本物のお金ではありませんが)」ことに気付いたからだそうです。お客さんが何回も来ているうちにきっと「飽きたから」売上げが減ったのではないかと考えたようです。そして、もっと怖くするための話し合いが始まったそうです。今年は、なぜかお化けが流行でした。すみれ組の「二度と帰れない恐怖の病院」では、開店してすぐに、上手い出来ないことに気づき、自分たちで「こんなあかんわ。もう閉めて、話し合おう。」と、いうことになったようです。何が上手い出来ないのか話し合ったことで、お化けが出ていくタイミングが合わなかったり、声が揃わなくて何を言っているのか聞こえないことに気づき、お化けのごとの自主練が始まったようです。その他のクラスも、ここには書き切れないほどたくさんの問題解決のための素晴らしい試行錯誤が、頻りに繰り返されていました。

先日、オーストラリアのニューイングランド大学からこのお店屋さんプロジェクトを見学に来られました。海外の幼児教育は個々の活動が中心のことが多く、このように子どもたちで話し合い合意を得て、協力しながら作り上げていく活動を見たことがないようで、「どうやってここまでできるのか」多くの質問をしてくださいました。「このように子どもたちが主体的に協力している姿に驚いた。」「担任の先生方のスキルがすごい。」「各グループの出来具合を見ながら、クラス全体をまとめていく先生はまるでオーケストラの指揮者のようだ。」と教えてくださいました。

大人も子どもも、決められたことをするのは簡単です。ところが、このお店屋さんプロジェクトのように筋書きのない学びの物語を、子どもと共に紡いでいくことは極めて難しいことであり、保育者の高い専門性が必要だと思います。

子どもたちが主体的に学んでいく力は、今一番幼児期に育てたい力と言われています。お店屋さんプロジェクトによって、その力にいっそう磨きがかかったのを感じます。そして幼児期の集大成である3学期を迎えます。目に見えにくい心の育ちを、大人がしっかりと見ていくことで、子どもに自信が付きまします。

年中組では、年長組のレストランのまねをして、ジュース屋さんやだんご屋さんが始まっています。ぶどう組は部屋の入り口のテラス前に机を並べて、お隣のすみれ組に来た保護者の方にちゃっかりジュースや焼き芋を売っていました。年少組の保育室からは黒いビニール袋を着たお化けが何人も出てくるし、憧れの年長組から面白そうな情報を取り込んでまねをしている姿を見ると、年中組年少組にも、それぞれの主体性が芽生えてきているのを感じます。

.....

(おひざのうえで12月号) ご意見や感想があれば是非お書き下さい

(組) ()